

『科学と社会』読書会資料

2022年12月17日

資料作成 渡辺規夫

「理化学研究所の設立期における科学研究体制」1957年『科学史研究』八木江里との共著

第1回 10月26日 239ページ～241ページ

はじめに

[要約]

日本科学史研究上の盲点 大正期以後の研究はない。

理化学研究所の設立は日本の科学研究体制の変化であった。

現在(1953年)は科学研究体制の第3の変革期である。

理化学研究所設立直前に民間企業の研究所、官製の研究所が設立されていた。

第2回 12月17日 242ページ～

§1 理化学研究所設立の背景

欧米における研究機関の発展

[要約]

19世紀終わりごろにはアマチュア科学者は大学教授に太刀打ちできなくなった。

19世紀後半には、**発明の工業化**により**科学にもとづいた技術**の必要が理解されるようになり、**応用の義務のない研究所**が設立され、**研究職**という新しい職業が成立した。

ジーメンスが設立を推進したドイツ国立物理工学研究所が日本の研究所設立のモデルとなった。

ジーメンス1816-1892 ドイツの電気技師

科学研究の重要性をはっきり認識していた。発電機の原理、電信システム ロンドンーカル
カタ。国立物理技術研究所の設立に尽力。科学が実用的な技術に貢献する。技術は科学の理
論にもとづくべである。市外電車、電気機関車、発電所の開拓者

19世紀末から20世紀初頭に欧米各国で研究所が設立された。ゼネラル電気会社では、その技術の原料として科学研究所をつくることが必要と考えられ、G.E.研究所が作られた。研究は一つの投資とされるようになったのである。

理研設立前の日本における研究体制 247ページ

大学は研究条件が劣悪であった。

大研究所設立の提唱

中村清二 富国強兵のために研究所が必要と訴えた。

高峰讓吉 戦艦1隻分の予算2000万円を研究所にあてることを要求